

第 22 回 鈴鹿医療科学大学 碧鈴祭

「復興シンポジウム～東日本大震災を語る～」

日時 平成 24 年 11 月 11 日(日) 10:00～13:00

場所 鈴鹿医療科学大学 千代崎キャンパス

はじめに

- 佐々木 信也 氏 (鈴鹿医療科学大学 保健衛生学部 医療福祉学科長) 挨拶



東日本大震災の発災以来、本学は宮城・福島両県でボランティア活動を実施してきた。その中で、本日お越しいただいた仙台の「六郷・七郷コミネット」の皆さんとお会いすることになった。鈴鹿より遠く離れた被災地に対して、本学としても何か出来ないかを模索する中で、発災からちょうど1年8ヵ月のこの11日、皆様をお迎えしてこのシンポジウムを開催できたことは、とても意義深いことだと思う。

これからも復興を成すまでには、まだまだ厳しい道のりが続くと思う。我々日本人は、そのことを忘れてはいけなし、風化させてはならない。当時の状況を思い起こすことによって、明日への活動に繋げて参りたい。

- 堀川 邦雄 氏 (六郷・七郷コミネット副会長) 若林区長メッセージ代読



鈴鹿医療科学大学に感謝と御礼を申し上げたい。鈴鹿医療科学大学の支援が官民協働組織「六郷・七郷コミネット」設立のきっかけになったことを伝え、現在の復興の進捗状況にも触れながら、今回のシンポジウムが被災地の復興と被災した方々の生活再建のきっかけになれば、との願いで結んだ。

第1部 基調報告「宮城県仙台市若林区の3.11から現在までの歩み」

- 八浪 英明 氏 (河北新報社 編集局デジタル編集部長)

～東日本大震災の概要と報道機関としての取り組み～



2011年3月11日に起きた震災について、被災地による被害の違い、地震と津波の脅威、被災者の震災当時の生活などの観点から、パワーポイントで詳細に説明した。

復興に向けた課題には、原発不安、震災の風化など多数存在するが、①遅すぎる復旧・復興、②原発事故、③政治の貧困さは大きな問題である。

その中で、これまで地元の新聞社として、①被災者に寄り添った紙面づくり、②ハイパーローカルジャーナリズム(被災者と同じ目線で報道する)、③発信力強化のためのプロジェクト、④風評被害との戦いに取り組んできた。

今後の防災、減災をどうするか。東南海地震に向けて、今回の震災を教訓に危機感を再認識してもらおう内容になった。

- 齊藤 康則 氏 (東北学院大学 共生社会経済学科 准教授)

～自立と支援のネットワーク～

震災後に仙台に赴任した経緯を紹介しながら、「被災者でない当事者」という立場から、被災者とどのように関わってきたのかを述べた。

被災者の自立がさかんに叫ばれる今、あらためて自立と支援の意味合いについて考えることが重要。中長期的な復旧・復興過程では、被災者自身が支援者となること、支援者が支援者を助けることも必要となる。

「六郷・七郷コミネット」などが実施している「お茶っこ飲み会」は、人間関係の回復復元力(レジリエンス)を促す取り組みであることにも言及した。



- 菊地 守 氏 (六郷・七郷コミネット代表)

～3.11の直後の避難誘導、救援活動～

消防団としての震災当時の活動を振り返った。

地震発生時に沿岸部を見回りし、災害状況を確認したときの様子、その約1時間後に津波が来襲するまでの救助活動、逃げない方々、家族への思いなど、自身の心の動きについて述べた。その後の救援対応、遺体探索活動にも触れた。

合わせて、被災後の農業の現状(被害)、現在進行中の農業法人の取り組みについて解説した。

「生きていれば何とかなる。津波は、日本全国どこでも起こる可能性がある。災害に負けないまちづくり、災害に負けない日本を新興という形で創っていきたい」と喚起し、支援を促した。



- 鈴木 誠 氏 (仙台市若林区まちづくり推進課)

～若林区の復興への取り組み～

現在の被災地の状況を、被災前の様子と比較しながらパワーポイントで示し、仙台市震災復興計画の概要とその進捗状況についても説明した。

震災後、鈴鹿医療科学大学との関わりによって立ち上がった「六郷・七郷コミネット」についても、その活動方針と1年8ヶ月の活動概略を説明した。合わせて、復興応援隊の活用と今後の展望についても触れた。

「六郷・七郷コミネット」事務局を代表して、「この震災を忘れない、忘れさせないために、あらゆる連携を模索し、力に変えて行きたい。来年も復興スポーツフェスティバルができるよう、鈴鹿医療科学大学のお力添えをいただき開催に漕ぎつけたい」と力強く語り、第1部を締めくくった。



第2部 パネルディスカッション「今求められる支援とは」

パネラー



コーディネーター



- 半沢 航太 さん（東北学院大学 経済学部 共生社会経済学科 3年）

～支援活動を通じつながりの形成～

震災後福島に帰り、災害ボランティアに参加したこと、また宮城に戻ってから活動した内容にも触れながら、そこでの感想を語った。

特に震災直後の支援と復興期に入ってからからの支援のあり方が違い、意識面では、一緒に頑張るといったスローガンが見えにくくなっている現状を指摘した。

このほか、支援者を支援するしくみづくりについても、その必要性を述べた。



- 渡部 彩友里 さん（東北学院大学 経済学部 共生社会経済学科 3年）

～震災が学生にもたらした変化～

海外滞在中に震災に遭ったため、現地での震災時の状況と支援活動を報告。震災を通して、出会った方との交流を通じた自身の心境の変化について振り返った。

その一例としてカンボジアでの支援を取りあげ、現場のニーズに合わせた支援の必要性を指摘した。それは、震災時の支援でも同様であることを強調した。

「人と人が出会わなければ何も始まらない。新しい出会いから視野を広げていきたい」とまとめた。



- 澤 弘視 さん（鈴鹿医療科学大学 保健衛生学部 医療栄養学科 2年）

～スポーツフェスティバルに参加して～

発災直後の行動を躊躇する心の揺れ動きから、活動に至るまでのきっかけに触れると共に、自分にできることを見極めながら活動する中で、被災地で出会った方々との交流から得られた元気について語った。またボランティアとしてスポーツフェスティバルに参加した感想を述べ 震災を風化させないために、これからも伝えることを継続していくと決意を示した。



- 中村 大睦 さん（鈴鹿医療科学大学 医用工学部 臨床工学科 3年）

～自分たちにできること～

ボランティアへの参加による、自身の気持ちの変化について語った。ボランティア活動を通して様々な人との出会いの中で、自分にできることを表現することが重要だと考えた。これからは、①シンポジウムなど活動を伝える場を設けること、②情報を伝える



機会が、ますます必要になってくる。

合わせて、ボランティアをする上で他人事でない心構え、友達的な当たり前の接し方が大切だと語った。

コーディネーターとしてのまとめ

● 齊藤 康則 氏（東北学院大学 経済学部 共生社会経済学科 准教授）

パネルディスカッションではボランティア、支援のあり方がテーマになった。中村大睦さんの「友達」という言葉が印象的であった。

時間経過と共に支援やボランティアの意味や内容が変化している。そこで大事なことは、つながりの形成ではないか。東日本大震災については、被災地と被災地外を繋ぐこと。またそれは、カンボジアのケースのように、国内と海外についても言えることかもしれない。は、被災だけではない悲しみ、苦しみが存在する。それはその地域、その現場でしか量れない固有のもの、多様なものである。

ボランティアを通して友達になっていき、関係を築く。その中で気づきを重ねていくような活動が、これから3~5年後のあいだに求められてくる。

● 貴島 日出見 氏（鈴鹿医療科学大学 保健衛生学部 医療福祉科 教授）

仙台の若林区から皆さんに来ていただき、このシンポジウムを実施し、1つのつながりを確認することができたと思っている。当初、本学が募金活動をしたときには、「自分たちの想いを受け止めてくれる人たちは、どのような人たちであるのか？」が分からなかった。見えないものに支援をしていくというのは、なかなか続かないところがある。

今回、若林区の皆さんとの「縁」により顔の見える関係、繋がりを持つことができた。自分たちが1,000キロも離れたところで、活動に参加しようとしても思うようにはできない。

被災地の皆様はそれぞれ、相当な喪失体験をお持ちになっている。そして、未来に向けた生活再建に取り組んでいる。鈴鹿にも応援団がいることを分かっていたことができれば、元気になれるのではないかと考えている。

このシンポジウムの中で、東日本大震災が風化しているという言葉があった。先頃、震災の関連死が2,300人ほど出ているという報道もあったが、これからますます関連死は増えていくと思われる。せつかく助かった命を、どのようにすれば生活再建に前向きに取り組んでいけるようにできるか。あらためて、まだまだ支援が必要なことを痛感している。

